

ハイエク 自生的秩序論の批判的検討*

——「設計を含む自生」は矛盾か？——

佐 東 大 作**

1 はじめに

市場経済を中心として、人間社会のダイナミズムを論じるハイエクの経済学において、常にそのレファレンス・ポイントとなっているのが「自生的秩序 (spontaneous order)」の概念である。社会主義 (計画経済) を含む全体主義的思考を、彼は「設計主義的合理主義 (constructivist rationalism)」と呼び徹底的に批判したが、この設計主義的思考から生み出されるのが、自生的秩序と対置される「設計的秩序 (constructed order)」である。設計的秩序が人間社会に対してもつ危険性を指摘し、自生的秩序の重要性和有益性をハイエクは一貫して説いている。

ところがハイエクは、自生的秩序と設計的秩序という 2 つの秩序を対立的にとらえつつも、後者が前者の維持と成長を促すと考えている¹。自生という原動力で形成される秩序の中に、意図的に設計された組織が含まれ、しかも

* 本稿は 2010 年 12 月 15 日、筑波大学に提出された課程博士 (経済学) 学位請求論文の一部に基づく。元となった学位請求論文の第 4 章の一部に加筆・修正を施し、完結した論文とした。なお学位請求論文は審査を通過し、2011 年 3 月 25 日、筑波大学より学位を授与された。

** 韓国外国語大学校国際地域大学院日本学科専任講師。元筑波大学人文社会系博士特別研究員。連絡先: ukasiad25@gmail.com, dsato@hufs.ac.kr

¹ この論点およびハイエク自生的秩序論の詳細については、佐東 (2011) 参照。

それが秩序の発展を支えるということは、両者を対立的に捉えるハイエクの自生的秩序論の矛盾点ではないか。このような批判がティモシー・サンドファーにより示された (Sandfur, 2009)。このサンドファーの批判に対して、ジョン・ハスナス、ブルース・コールドウェル、ダニエル・B・クラインらが応答し、サンドファーによる批判の論駁が試みられた。3人3様のハイエク論が示されており興味深い、同時に共通する点もあり、その共通点はハイエクの経済思想を理解するうえでとりわけ重要な論点であると思われる。

そこで本稿は、サンドファーと3人のハイエキアンとの間で行われた批判と応答とを考察し、ハイエクのいう自生的秩序の特質を検討することを目的とする。本稿のサブタイトルに示した「設計を含む自生は矛盾か？」という問いに対して、その結論として示される答えは「矛盾ではない」である。まず、ハイエクの自生的秩序の概念がいかなるものかについて、その要点を簡潔に述べる(2)。次にサンドファーのハイエク批判を考察し(3)、その後ハスナス、コールドウェル、クラインの順に、それぞれがサンドファーに対して示した応答を取り上げ(4, 5, 6)、最後に彼らの応答の要点をまとめることにより、サンドファーのハイエク批判に対抗するハイエク解釈を示し、結論とする(7)。

2 ハイエクの自生的秩序論

ここではハイエクの自生的秩序論を詳述することが主眼ではないので、サンドファーの批判と、それに対するハイエキアンたちの応答の内容を理解するために必要である範囲に限って、その要点を簡潔に述べておくことにする。ここでの議論は主として Hayek (1973) 及び Hayek (1976) に基づく。

ハイエクは「秩序」という語を、人々の集団の中になんらかの行動パターンが形成されており、またそれゆえに、人々は互いの行動に関してある程度予測することが可能である状態を表すものとして用いている。この秩序に関して、

ハイエクは性質上の 2 つの区分を示した。その一方は「つくられた」秩序であり、他方は「成長した」秩序である。前者は「設計的秩序」または単に「組織」と呼ばれ、後者は「自生的秩序」または単に「秩序」と呼ばれる。この 2 つのタイプの秩序がどのように異なり、いかにして形成されるのかについて、自生的秩序（秩序）の重要性を説く立場から詳細に論じたのが、ハイエクの自生的秩序論である²。

さて、人々の行動にある種の規則性（パターン）が見出される状態を秩序と呼ぶならば、秩序を形成する人々は、そのようなパターンを現出させる行動ルールに従っているはずである。秩序が「つくられたもの」なのか「成長したもの」なのかの根本的な違いは、このルールが誰かの手によって意図的に与えられ、強制的に守られているものなのか、それとも人々の間でおのずと形成され（発見された）自発的に守られている、または特に意識することなく習慣的に守られるようになっているものなのか、という点にある。つまり、ルール自体も自生的なルールと設計されたルールとに区分されるということである。

だが、自生的秩序を形成するルールは人工的に作り出されたものではないとはいえ、もちろん自然のうちに元から備わっていたわけでもない。自然のうちにそもそも埋め込まれたものであるとすれば、人間の社会が形成され発展していく道筋（歴史）が、あたかも自然法則を読み解くかのように理解されることになってしまうだろう。そこでハイエクは「自生」という語に関して、「自

² 誤解を招かないように付け加えておくが、ハイエクは「自生的秩序論」なる著作も論文も残してはいない。議論の至るところでこの概念を用いているが、とくにまとまった形で理論的な側面を重視して論じたものとして、ここで参照した『法・立法・自由』第 1 巻 (Hayek, 1973) を挙げておく。

³ Hayek (1967) 参照。また、自生的秩序を「成長した」秩序としたのは、自然法則のような原理を想定していないからだと思われる。人々の相互的な行為から秩序が成長するが、いかなる行為の相互作用からいかなる秩序が形成されるのかを説明する法則が見出されるわけではない。むしろ、秩序がいかにして成長していくのかという、いわば「秩序の成長史」の考察にハイエクの力点はあると考えられる。

然でも人為でもなく行為の結果として生じる」という説明を与えている³。

ハイエクの自生的秩序論の中心的な主張は、人々の間で発見された一般的なルール（ノモス）に従いつつ自分の目的をそれぞれ追求する個々人の活動から、誰も意図することなく、結果的に社会秩序が生成される、という点にある⁴。自生的秩序の対極にある設計的秩序は、特定の目的を達成すべく設定された特殊なルール（テシス）に従って人々が行動することにより形成される。ノモスそれ自体は特定の目的を何ら含んでおらず、その意味で目的独立的なルールとも呼ばれ、他方のテシスは目的依存的なルールとも言われる。対立する特徴をもつこの 2 つのルールが、これまた対立的な性質をもつ 2 つの秩序を、それぞれ形成する。

しかしなぜハイエクは、この 2 つの秩序をめぐって、設計的秩序の危険性を強く訴え自生的秩序の重要性を説きつづけたのか。後に見るコールドウェルも指摘しているが、そこにはハイエクが生きた時代背景も関係していると思われる。1940 年代以降のハイエクは理論経済学の研究から遠ざかり、広く政治や社会一般に関する思想的言説を展開する傾向を示すようになる。その背景には計画経済（社会主義）への人々の憧れやファシズムの台頭などといった時代の空気が流れている。人間社会の発展の歴史を眺めるハイエクの目には、それが大局的には自生的秩序の成長と映っていたのはたしかだろうが、そのことだけが自生的秩序の重要性を説く根拠となったわけではない。独裁者を生み出す全体主義によって個人の自由が蝕まれるという強い危機感がハイエクにあったことは間違いない。

ではなぜ、ハイエクにとって、個人の自由が重視されなければならないものだったのか。誰からも強制されることなく個々人が自由に行為した結果、市場をその典型例とする偉大な秩序が成長してきたからなのか。あるいは逆に、そ

⁴ それゆえ自生的秩序の典型例と目されるのが市場である。したがってハイエクの市場論は、自生的秩序の成長と発展を示す顕著な具体例として論じられるものである。

のような偉大な秩序こそが、自由に行為しそれぞれに固有の目的を追求する個人を生み出すことになったからなのか。この点に関して、ハイエクは必ずしも明確な主張をしているわけではない。あえて言えば、ハイエクの答えはその両方である。個人の自由と自生的秩序とはおそらく一体の関係にある。それゆえ彼は古典的自由主義の 3 つの理念、すなわち①強制からの自由、②法の支配、③制度の自生的成長の 3 つの理念に共感し、それを自らの思想的な基盤としているのである⁵。人間社会の制度的発展は、独裁的な支配者の強制的統治によって進んできたのではなく、むしろそのような独裁者の強制から逃れた個人が自由に行為した結果であった。それゆえそこには人による支配がなく、その代わりに自生的に形成され定着した法（規範）による支配が、伝統または慣習として受け継がれてきた歴史がある。

そのような法は、社会が複雑化するにつれ、具体的には成文化された形で人々に示されるようになってきた。ハイエクによれば、法体系に生じる不具合を調整する制度として裁判官が登場し、その役割は新たな法をつくり出すことではなく、制度の自生的発展を促すように法を解釈し運用することにある。一般に、法廷で追及されるべきは正義であると理解されているが、その正義とは必ずしも絶対不変のものであるとは限らない。むしろ絶対不変の「社会正義」を振りかざすことにハイエクは設計主義的な危険性を読み取り、自生的秩序の成長と発展を促す慣習的規則として、正しい行為の一般的な規則（rules of just conduct）すなわち「正義」もまた形成されるものと捉えている。

ハイエクの自生的秩序論を、以下に見る批判と応答とを理解する上で必要な点を押さえつつ、以上のように要約しておく。次章で見るサンドファーの批判に引き継ぐかたちで再度述べるならば、ハイエクは人間社会の秩序形成の歴史を、設計的秩序と自生的秩序との間の対立であると同時に相互的な作用の結果

⁵ 古典的自由主義に関するハイエクの見解については、Hayek (1973/1978) 等を参照。

としても見ている。強制や設計があるからこそ、そこから逃れ自由に行為しようとする運動が生じてきたし、またその結果として生じる混乱を治めるために、時として設計や強制が大きな役割を果たすこともあった。ただし、秩序の形成を設計的取り組みのみに任せようとするならば、市場を可能にしてきた「自生」という秩序形成の原動力を失うことになる。この点にハイエクは深刻な危険を見出し警鐘を鳴らしている。

3 サンドファーの問題提起—設計を含む自生という矛盾—

ティモシー・サンドファーによるハイエク自生的秩序論の批判と、それに対して 3 人のハイエキアンが示した応答を見ていくことにしよう。サンドファーは次の 4 つの論点を提示した (Sandfur, 2009)。^①秩序が設計的か自生的かは秩序を見る視点の取り方によるので、この 2 種の秩序の間には原理的には違いがない。それゆえ^②自生的秩序という概念は秩序のあり様を記述することには有効だとしても、設計主義に対する規範的な批判の基礎にはなりえない。だが設計的秩序を規範的に批判できない、すなわちそのような秩序のあり方は正しくないと言えないのだとしたら、自生した秩序の正当性の根拠をどこに求めればよいのか。もしも^③存続してきた秩序は存続してきたから正しいのだとすれば、自生的秩序という概念自体には正しくない秩序が何かを認識する基準がないことになる。そうだとすればハイエクの言う秩序の修正や改良はいかにして可能となるのか。現に我々は社会を改良しようとして様々な試みを行ってきた。その改良の結果として存在しているのが我々の現在の社会である。ということは、^④秩序を改良するためには何らかの設計主義的な取り組みが必要とされるはずではないか。しかし自生的か設計的かの原理的な区分が不可能だとすれば・・・ここで結局は^①の論点に戻ることになる。

^①から順に各論点を詳しく見てみよう。企業組織は設計的秩序の一例と考えられる。トップである企業家が自らの計画に基づき従業員に指令を与えること

で企業が経営される。しかし市場という広い視点から見れば、企業の存在自体は設計の産物ではなく、また市場も誰かの意図に従って発生したものではない。視野を狭く取り企業組織だけを観察すれば、そこに見出されるのは設計的秩序だが、視野を広く取り市場における企業を観察すれば、その発生も行動も自生的だと見ることができる。サンドファーは「視点の取り方によって」という表現で以上のようなことを指摘している。

人間の社会全体は巨大な自生的秩序だとしても、その内部に存在する個々の制度やシステムは、人間の意図的な努力によって改良され変化してきた。例えば学校制度を考えると、社会が進化していく過程で学校という教育システムが自生的に登場してきたとみることは可能だが、小・中・高の修業年数をそれぞれ 6・3・3 にするというような制度は設計されたものである。自生的秩序には必ずしも自生したとは言えない要素が含まれている。ハイエクは、秩序を自生させる「法の支配」が働いている限り、そのような部分的設計は秩序の自生に反するものではなく矛盾はないと考えている⁶。秩序全体を見渡す視点を取れば、そこに含まれる要素はすべて自生したものとみなせる。

ハイエクは秩序全体という語を印籠のように取り出して見せることで、自生的秩序の内部に設計的要素を取り込ませることを正当化している。このようなハイエクの態度をサンドファーは「ハイエクは自生的秩序の概念の柔軟性 (flexibility) をうまく使っている」と述べているが、この柔軟性が意味するところが、観察者の視点の取り方によって秩序は自生的にも設計的にも見えると

⁶ 「秩序はその諸要素の意図をもった行為に依拠するともいえる。勿論その時には、「意図」とはそれらの行為がその秩序の存続または回復を保障する傾向があること以上の何も意味しない (…) しかし、一般的には、この関連では「意図」という用語を使わない方がよく、代わりに「機能」を用いるのが望ましい」 (Hayek, 1973:39 (邦訳 53 頁); 傍点引用者)。ハイエクは人間が意図的に、秩序の形成・維持という目的を持って努力することを、秩序を構成する諸要素である人間に秩序を維持しようとする機能が備わっている、と解釈している。意図ではなく機能だと考えることで、矛盾を回避しようとしたと見ることでもできるだろう。

いうことであるならば、結局のところ自生的／設計的の区分には原理的な差が明確にあるわけではないということになる⁷。これが①の論点である。

①の批判，すなわち秩序が自生的か設計的かに関して概念的・原理的な区別はつけられないという批判が当たっているとすれば、次のような②の批判が導かれるとサンドファーは考える。トップダウンで意志決定が行なわれる官僚機構のような設計的秩序を、それが自生的秩序の発達を妨害するという意味で批判することは、ハイエクの立場からはできない。なぜならそのような設計的秩序も社会という大きな自生的秩序の中で生み出されたものであり、その設計的秩序が機能することから何らかの別の秩序が生じてくるかもしれないからである。

サンドファーによれば、ハイエクは自生的秩序が設計的秩序をその内部に含んでいること認めていた。自生的秩序とは、自生的に生起・成長する慣習や伝統と、既存の秩序の一部を改良しようとする意図的な取り組みとの相互作用の過程である、とハイエクは認識していたが、サンドファーはこの2つの相互作用の境界が曖昧であると述べている。「相互作用の境界が曖昧だ」とは、おそらく、ここでいう「作用」が自生的なものなのか、それとも意図的なものなのかの区別が明確にはつけられないという意味だと思われる。そうだとすれば、秩序形成に対する設計的取り組みを、秩序形成は自生作用に任せておいた方がよいとする立場から批判することは困難だということになる。サンドファーはこれを、②自生的秩序概念は設計主義に対する規範的な（normative）批判の基礎にはなりえないと表現した。

サンドファーは「設計」との対比で「自生」概念の弱点を指摘するために、大学構内で建物の間に歩道をつくらうとする例を挙げている。建築家が歩道敷

⁷ 秩序が自生的/設計的のどちらのタイプにも見えるということは、それぞれの形成原理である2つのルール（ノモスとテシス）による区別を無効にしまうゆえに、原理的な（in principle）違いがないということになる。

設計画を立て、ハイエキアンの友人に意見を求める。すると彼は、歩道は学生のためにあるのだから学生の移動から最適な歩道が自生するはずだと言う。そこで建築家は学生の様子をしばらく観察し、一年後最適だと思われる設計図をつくって現場に行ってみる。するとそこへまたもやハイエキアンの友人がやってきて、もう一年待ってみろと言う。授業の部屋割や受講学生数の変化、また学生の嗜好の変化などが反映されて、学生の移動の様子が変化するはずだというのがその理由である。結局、学生の移動の様子が動態的である以上、最適な歩道の設計を自生に任せようとすればそれ自体が動態的にならざるを得ないゆえ、いつまでたっても歩道は敷設されないままになる。必要な歩道の敷設を原理的に不可能にしてしまうような立場から、人々の必要性を満たす歩道敷設「計画」を批判することができるのか。

ハイエクは、複雑な秩序を維持できるのは誰かが人々に指令を下すことによるのではなく、秩序の自生的形成を助けるようなルールが人々から義務的に守られる（法の支配）ことと、それらのルールの改良による、と考えている。サンドファーはハイエクのこの認識に対して、多かれ少なかれあらゆるものが秩序の自生を助けることになり、その中には設計された強制装置も含まれるだろうとの解釈を示している。

設計主義的秩序を望ましくないもの、何らかの意味で正しくないものだとし、て退けることが自生的秩序概念にはできないとすれば、これを逆に見ると自生的秩序自体もその望ましさ、あるいは正当性を示しえないということになる。これが批判点③である。いかなる秩序が望ましいのか。また自生的秩序内では、不正だ（injustice）と思われる事態の認識と判断—我々は日常的にこの認識と判断を行なっているのだが—が可能となるのか。ハイエクは「より一般的な正義原則」によって判断するというのが、サンドファーはそのような正義原則を我々はいかにして知なのかという疑問を投じている。社会的なルールも、またそのルールを認識する人間の知性も、ともに社会進化（文化的進化）の産物だ

とハイエクは考えている。進化の過程にある、つまり今まさに進化しつつあるルールに対して、その善悪を判断するなどということが、同じく進化の途上にある人間の知性になしえるのか。一方の価値を判断するには、判断する方が「進化プロセスの外部に立たなければならないのではないか」、言い換えれば進化の過程を客観的にみる視点を必要とするのではないか。これが批判点④である。

サンドファーの批判を支持する立場に立つと、さらに次のように考えられる。そもそもハイエクの言うルール（ノモス）とは目的を持たないものであるゆえ、そのルールを人々が遵守する結果として生じる事態を根拠にルールの是非を判断するのは不可能なのではないか。もしも法に何らかの目的が含まれているのだとすれば、その目的を達成できたかどうか法が法の是非を問うひとつの基準になると考えられるが、そもそもそのような目的がないのだから、結果からルールの是非を判断することはできないはずである。結果の善悪を判断するには別の基準が必要とされるだろう。その基準に照らしてみても、結果の原因となったルールの是非を問うことはできる。だがサンドファーの指摘に従うならば、そのような客観的な基準を「一般的な正義原則」に求めることにも無理があるということになる。

他方ハイエクは、ルールに対して自生的秩序の内部で行われる批判に、ルールの是非を問う基準を求めている。あるルールの是非は他のルールとの無矛盾性（consistency）に求められ、もしも矛盾が認められればそのルールは秩序内部で改良を促されることになる。しかしサンドファーによれば、他のルールの根拠を我々は知りえないのだから、仮に矛盾があるとしてもそれを正すべきとする根本的な理由を見出すことはできない。これは言い換えれば、そもそもいかなるルールの客観的な正当性をも我々は知りえないのに、ルールどうしが矛盾したからといって、そのことをどちらか一方を改良することの根拠として認めることはできないだろう、という意味だと思われる。またサンドファーは、

南北戦争以前のアメリカの奴隷制下では奴隷制に関する法律をめぐって白人に都合の良いような法解釈が行なわれていた例を挙げ、仮にルールどうしの矛盾があったとしても我々はその矛盾に耐えられないわけではなく、柔軟に矛盾に対応してきたのだ、と皮肉めいた指摘をしている。

我々は、その存在理由も内容全体も分からないままルールに従わざるをえない。また、そのルールは設計されたものではない、つまり特定の目的をもとから与えられているわけではない。そうだとすれば我々は、ルール間に生じた矛盾が取るに足らないものなのか深刻なものなのか、矛盾を解消しなければならないのか、それとも矛盾を抱えたままですべてのルールを運用していくべきなのか、そういったことの判断をつける術を知ることができないだろう。結局のところ、単に経験からだけではなく何らかの合理的思考に基づいて導き出される抽象的な正義概念に基づかなければ、長期にわたって行なわれてきた伝統的な不正を解消することはできないのではないか、サンドファーはこのように述べている。この主張はおそらく彼の基本的な立場を示していると思われる。

サンドファーによれば、ハイエクもこのような合理的改良の方法を自生的秩序の説明の中に組み込もうとしたが失敗しているという。なぜならば、そのように試みたとしても、サンドファーが根本的な問題点と捉えている 4 つの批判のうちの①すなわち設計的か自生的かの区別がつかなくなってしまうという問題点を、解消することはできないからである。自生的秩序の概念を設計的秩序を含めるものにまで拡張してしまったならば、自生的／設計的の区分は無効になる。ハイエクの自生的秩序のアイデアによるかぎり、その内部で発生する不正と思われる事態を、我々は不正と判断・認識する根拠をもちえない。したがって、そのように思われる事態を改善へと導くこともできない。

しかし実際には、我々は何らかの事態を不正と判断し、それを改善してきた。いかにしてそのようなことが可能となってきたのか。サンドファーは、米国の最高裁がホモセクシュアルどうしの性交渉を禁じたテキサス州の州法を違憲だ

とした事例を挙げ、次のように論じている。このような法律は伝統的に支持されてきたが、それが個人の自由を奪うものだという反対意見もある。しかし、多くの保守層が最高裁の判決に対して、伝統や慣習の盲目的遵守を説くハイエクの立場から、このような判決は伝統に反するとの否定的見解を示した。その一方で、最高裁の判決を支持する多くの世論は、テキサス州の州法が合衆国憲法で規定される個人の自由に反するものだという立場を示している。この立場もまた、ハイエクの議論によって支持されることになる。ハイエクは裁判官の役割として、必ずしも明示的ではないが秩序の維持に必要なルールと、実際に制定され明文化されている法律（立法）とのギャップを、一般的な合意が可能となるようなかたちで埋めることを挙げている。多くの人が違憲だと考えるならば、そのような社会的合意があるとみなされる。最高裁による違憲との判断はハイエクの立場から是とすることもできる。

このようなルールの変化は、アメリカの法全体に対する合理的な改良なのか（テキサス州と同様の州法を多くの州が制定していた）、それともホモセクシュアルどうしの性交渉という限られたケースに対する、ピースミールな改良にすぎないのか。それは視点の取り方による。ハイエクの自生的秩序概念は、改良に反対する保守層の立場も改良に賛成する世論の大勢も、どちらをも支持する。これは自生的秩序の中に設計的改良も含めてしまおうとする方向性にも通じる。そのように大風呂敷を広げることを、サンドファーは「ルールのシステム全体は、慣習の自生的成長と、既存のシステムの部分的な意図的改良とが、相互に作用し合う過程で進む進化プロセスの結果である」というハイエクの文章を引用して要約している。意図的改良を許容することは計画者による改良を認めることであり、しかし大局的にはそれも秩序の自生プロセスの一部でしかないのなら、結局のところ計画者は秩序の進化に手を出すことはできない（出せるように見えて実は自生的進化の一部でしかない）ということになる。このようなどちらとも取れる曖昧さが、ハイエクの議論を弱体化させてしまうのだ

というのがサンドファーの批判の中心的主張である。

4 応答（１）—ジョン・ハスナス—

さて次に、サンドファーの批判に対して 3 人のハイエキアンが行なった応答を、それぞれ見ていくことにしよう。まずジョン・ハスナスの応答を取り挙げる (Hasnas, 2009)。

批判①に対するハスナスの応答は非常にシンプルである。設計的秩序と自生的秩序の違いは、秩序をもたらす最終的な意志決定者がいるかいないかによるという。計画経済における中央当局や企業における経営陣などが、この「最終的な意志決定者」に当たるだろう。他方、自生的秩序にはそのような決定者がいない。個々の企業が経営者の決定に基づいて動くものであるとしても、複数の企業間の競争や、企業と消費者の相互関係によって成立する市場には、企業経営者のような最終意思決定者はいない。仮に、最終的には消費者によって企業価値が判断されるとしても、その評価には消費者の集会的な目的が含意されているわけではない。個々の消費者は基本的に、企業が提供する財・サービスから自らの効用がどれほど増加するかを基準として企業を評価するはずである。これは個々人の目的の実現度といってもよい。個々人の目的が多様であれば、あらかじめ消費者の総意として特定の目的を前提し、そのうえで企業を評価することもできないだろう。市場は一人の誰か、または一つの集団の価値基準や目的を前提して成立するものではない。まったく逆に、多様な目的の追求を促進するのが市場の働きであるとハイエクは考えている。設計的秩序と自生的秩序との原理的または概念的区分は、それぞれの秩序が誰か一人の人または一つの集団によってもたらされるかどうかにある。

以上のように考えるならば、批判②に対する応答はオートマチックに出てくる。サンドファーは 2 種の秩序間に概念的な区別がつけられないゆえに、自生的秩序の概念は設計主義への有効な批判原理にはなりえないと言っているの

だから、この 2 種の間に区別がつけられるなら批判②は当たっていないということになる。ハスナスはそう簡潔に述べた上で、次のように論じている。

自生的秩序の概念によって設計主義を規範的な意味で批判できるとしても、つまり「我々は秩序の形成と維持を設計ではなく自生的なプロセスに任せるべきだ」と言えるとしても、それがただちに我々が設計主義よりも自生プロセスを好むということになるとは限らない。社会的な問題を自然な解決に求めることは、設計的な解決よりも、おそらく多くの時間を必要とするだろう。そうであればなぜ我々は設計主義に対して自生的プロセスに優位を与えなければならないのか。

我々はここで、ハイエクが批判を向けた設計主義または全体主義が、社会全体の計画化を意味する場合であることに注意しなければならない。ハイエクは集団に特権的利益を与えることを批判しており、そのような利益集団自体—例えば特定産業や思想団体や宗教団体、または社会運動や政治活動を目的とする諸集団—は、一般的には全体主義的傾向を示す。しかしハイエクが批判の標的とするのは、そのような集団に特権を与える権力者や、権限を拡張された政府のような計画当局である。様々な団体が存在すること自体をハイエクは批判するわけではない。人々が自らの思想・信条や目的に従って集団を形成することは精神の自由に属する。問題なのは、それらのどれかに特権が与えられることである。なぜならば、特権を与える側にはその理由があるはずであり、その理由こそがまさに、社会全体に対して、すなわちその社会に属するすべての個々人に対して、特定目的の強制を意味しているからである。

設計主義に対するハイエクの批判を以上のように理解するならば、彼が個々の計画的行為を批判したわけではないことは容易に理解される。サンドファーが指摘しているとおり、ハイエクは部分的には特定の意図に基づく計画的行為を認めていた。しかしそれは政府の権力によって行なわれる計画を積極的に認めるものではなく、個々の企業や個人がそれぞれの目的を自由に追求するため

に払う意図的努力を認めるものである。市場または社会という大きなフレームワーク（秩序）の中で見れば、個々の計画は他の様々な計画との間の絶えざる競争または実験的過程にさらされることになる。その中でどれが優位になり、社会に変化や進歩をもたらすかは、特定の個人や集団によって決定されることではない。その意味で、社会全体は自生的な変化の過程にあるといえる。

ではなぜ、そのような自ら変化する社会の方が設計された社会よりも優れているのか。ハスナスによれば、自生的秩序は設計的秩序よりも「平和的協力（peaceful cooperation）」という道徳的価値を促進するという。そして人々の間で「平和的協力」を可能にするルールが「正義に適う行動のルール（rules of just conduct）」だが、我々は「無知」ゆえその内容を前もって知ることができない。設計的秩序では設計者によってルールが与えられるため、そしてその変更は設計者にしか行なえないため、仮に人々の間でルールに何らかの不備が見つかったとしてもなかなか修正されないだろう。設計者もまた「無知」である、つまり不完全な知識把握能力（認識の限界）しか備わっていないのだから、その不備を認識することも修正することも容易ではない。しかしより重要なのは、そもそもそのルールを与えたのは設計者であり、そのルールを人々に守らせることが設計者の意図であるならば、その修正を設計者自身が行なう保障はないということである。

他方、自生的秩序の場合、あるルールから不利益を被る人の数が多くなれば、自ずとそのルールは修正されていく⁸。ルールが誰かの意図の下に与えられたものではない以上、その運用の当事者である我々に修正も委ねられているので、ルールは柔軟に変化しうる。その結果として、人々はお互いに利益をもたらすように、できるかぎり争いを避け目的実現のためのコストが少なくなるように、

⁸ このような解釈は（ハスナス自身がここでそう明示しているわけではないが）ハイエクをルール功利主義者と捉える立場を示している。

平和な秩序の実現へ向けて協力する道を選ぶだろう、こうして我々は設計的秩序よりも自生的秩序の方を好むのだ、ハスナスはこうのように解釈している。

ハイエクはその著作の随所で設計主義ないしは全体主義が道徳的退廃を生み出すことを指摘している⁹。設計主義自体も、例えば人々の間の「絶対的平等」を目指すというような道徳的主張を持っているが、それは設計者によって与えられたものである。またその道徳的価値を実現するために個人の自由が犠牲にされるのはやむを得ないとされ、その結果として、仮に設計主義の代表と目される社会主義が「個人の自由と平和な社会の実現」を目標に掲げたとしても、それは手法上失敗に終わるとハイエクは考えている¹⁰。

さらにハイエクは、我々が道徳を論じるべき理由を、自由な行為が行なわれた結果として生じる不都合を改善する必要性にあると捉えていた¹¹。ある人の自由な行為が別の人の自由への障碍となる場合がある、いや場合があるというよりも、現実の社会ではそれがごく普通である。それゆえに個々人間で行為を調整する、つまりどのような条件でどのような行為ならば行なつてよいのか、複数の個人の自由な行為が互いの障碍となつてしまい緊張が生じた場合、どのような解決を図るのが望ましいのか、などを考慮する必要が生じるのであり、それこそが我々が道徳を必要とするゆえんだろう。また、そのような経験を我々が重ねることで、道徳自体も変化し成長するとハイエクは見ている。自由な社会では、ある固定された道徳観が最初から設定されているわけではない。

他方、設計主義の社会では道徳さえもがトップダウンで人々に与えられ固定されているため、その道徳を実践する（道徳的に振舞う）のは個人の選択ではなく、支配者または統治者の強制による¹²。究極的には個々人がいかに振る舞うかが設計されているゆえに「設計主義」なのである。自由な社会では法律に

⁹ Hayek (1944:Chap.10) 等。

¹⁰ Hayek (1944:35) 等。

¹¹ Hayek (1962/1967:231) 等。

具体化されていない行為の選択基準や価値判断が道徳として議論されるが、設計主義ではその必要がない。人々の間で議論されなければ変化も成長もなく、もし変化や成長があるとすれば、設計当局による計画変更に伴ったものか、あるいは独裁者の心変わりによるほかない。

いずれにせよ設計主義では、仮に人々の間でなんらかの協力的行為が行なわれるとしても、それは強制的であり、自発的ではない可能性が高い。協力することが自らの利益になるのなら人々は協力するだろうが、個人の財産の自由がないとしたら自発的に他者と協力してなんらかの目的を実現しようとする動機は生じにくい。したがって、設計的秩序の中で促進されるのは「平和的協力」ではなく「強制的協力」ということになる。

ハスナスはサンドファーの批判①②をきっぱりと退けているが、③と④の批判に対しては逆に肯定しつつ、ハイエクの法概念には弱点があることを認めている。ルール（ここでは特に慣習法を指しているが）が生成するプロセスは自生的である。その一方でハイエクは、個々の裁判での判決に必要とされる新しい基準（法解釈）を、ルール全体に適合するように打ち出していくことに、裁判官の役割を見出している。裁判官個人の解釈が要求されるという意味で、これは個人の意図的な努力である。ハスナスはこれに対して次のような解釈を示している。

新しい解釈をルール全体に適合するものにしなければならないのは、実はその背後に個人の自由を保護するという目的があるからであり、これは自生的秩序を生成・維持するルールには目的が設定されない（目的独立的）という原則と矛盾する。個々のルール（立法；テシス）には目的が設定されるが、ルール

¹² 法律と道徳との違いは、法律が違法行為への罰則を伴うのに対し、道徳に反する振る舞いには罰則がなく、非難に留まるという点にある。法的制裁が社会的合意の上での強制措置であるのに対し、道徳的非難は個々人間での「温度差」を伴う。どの程度非難すべきなのかは個々人の判断による。したがって、道徳は法律の基礎にあるが、その基礎を明示的にルール化したものが法律だという見方もできる。

体系全体には目的が設定されないというのがハイエクの基本的な立場であることを考えれば、ハスナスの指摘は正当だろう。裁判官の意図的な努力により、ルール体系の自生プロセスは監視される。ということは、ルール体系は自生的でもあるが同時に設計的秩序としての性質も帯びることになり、この点には一貫性が認められない。

一般に、ルール体系（法システム）は自生するものとは捉えられておらず、秩序の自生プロセスの外に位置する独自の（独占的な）領域である、言い換えれば、市場に代表される自生的秩序というゲームのルールはゲームの外野から与えられるものだと考えられている。ハスナスは、ルールに関してはハイエクも同様だと見ている。だから裁判官には集合的意志決定の代表という設計者の性格が与えられるが、これを自生プロセスに含めようとしたために、法の自生という主張の矛盾に対する批判を呼ぶことになった。ハスナスは、ハイエクの後継者である我々は先代と同じ落とし穴にはまらないために、倫理（ethics）を社会進化の産物ではなく自生プロセスとは別の独立した哲学的基礎を持つものと捉え、この独立領域から我々はルールの適切さを判断できるはずだと述べている。これはハイエキアンとしてのハスナスによる、サンドファーの批判③④、すなわちルールの不適切さの認識とその改良の不可能性に対する解答である。

だが、ハスナスのこの応答を必ずしも肯定的に捉えることはできない。批判①②に対する応答、設計か自生かの区別は秩序全体に関する最終意志決定者が存在するかどうかにある、という応答は肯定できるが、③④に対する応答には難点があると思われる。まず、裁判官の役割をルールに関する最終的な意志決定者とみなすことが正当かどうかは問われなければならない。ハイエクは裁判官の役割について、次のように述べている。

ルールを言葉で明文化することの意図は、第一に、特定の事例への

適用に対する合意を得ることにあろう。この場合、それまで実践の形でしか存在しなかったルールを単に明文化することと、それまで一度もそれに準拠して行為がなされたことはないが、いったん言明されれば、たいていの人が合理的であるとして受容するルールの言明との区別は、不可能であることが多い。しかし、どちらの場合でも、裁判官は自身の好むルールを宣言できるわけではない。彼が宣言するルールは、既存のルールが可能にしている行為秩序の維持、改良に役立つような仕方です、すでに承認されている一群のルールに認められる明らかなギャップを埋めるものでなくてはならない。

(Hayek, 1973:99-100 (邦訳 130 頁))

裁判官はたしかに熟慮の上でルールを明文化する役割を担ってはいるが、そこに反映されるのは彼の恣意的な判断であってはならない。それゆえ裁判官は判例を常に参照するのであり、彼が手を加えられるのは、ルール体系の整合性を損なうようなルール間の矛盾だけである。ルールそのものは自生的な過程において変化すると思われるが、裁判官はそれをよく観察し、ルール全体の整合的な体系の維持に努めるのみである。

さらに、ルールを自生プロセスの外部にあるとする認識がハイエクにあったという見方にも疑問がある。このような解釈はハイエクの主張の有効性を逆に損ねてしまうように思える。ルールも含めたあらゆるものが自生の過程にある。たしかにノモス（自由の法）の背景には自然法があるが、それすらも発見によって認識されるものである以上、誰かの意図によって与えられたものではない。あえて言えば「自然」によって与えられたものである。ルールが自生過程から外れた独自の領域（倫理）に根拠を持つかどうかは、おそらくハイエクにとっては問題ではなく、結果として我々が適切なルールを選択できる、そのように我々は進化してきたのだということが、ハイエクの強い主張だと見るべきだろ

う。

5 応答（２）—ブルース・コールドウェル—

次にブルース・コールドウェルの応答を取り上げる。コールドウェルはまず、「自由と経済システム」(Hayek, 1939)からの長い引用文において¹³、ハイエクは計画という行為全般を批判したわけではないと指摘している。その引用箇所ではハイエクは「一般的なルール体系の計画」という語を用いているが、これは「法の一般的支配 (the general rule of law)」を実際に機能させる手法を指していると見られる。契約の自由や私有財産制などの一般的なルールは、誰かの意図的な設計によって生み出されたものではないが、それらを実際に有効に機能させるためには、ルールに違反した場合の法的な罰則規定などが必要となる。そういった諸制度はルールが守られるようにするという計画（目的）の下につくられたものである（もちろんここで含意されている計画者は政府である）。

たしかに秩序を自生させるメカニズムの中には設計的要素（設計的秩序）が含まれているように見える。ただしこれは中央当局による社会全体の計画を意図したものではない。ルールの下で個々人がいかに行動し、いかなる意志決定を行なうかは、すべて個々人に委ねられている。

コールドウェルは同じく「自由と経済システム」から「我々の時代の計画者は、彼ら一最終的には彼らの精神—が個々の局面で人々のなすべきことを決定すると考えている」（傍点本論文筆者）という文章を引用し、ここにハイエクの設計主義批判の中心が現れているとしている。そうだとすればコールドウェルは、自生的秩序と設計的秩序との違いを、秩序内での個々人の行動に関して

¹³ コールドウェルが引用した箇所の冒頭でハイエクは「我々は、すべての人に等しく適用され、また永続的であるような、一般的なルールの体系 (a system of general rules) を「計画」できる。そのようなルール体系は、我々は何をなすべきであり、いかにして生計を立てるかについての決定を個々人に委ねる制度的フレームワークを提供するものである」と述べている。

その決定を行なうのが個人本人なのか、それとも誰か別の人間または集団なのかという点にあると捉えていることになる。これは前節で考察したハスナスの见解と共通する。

しかしコールドウェルはハスナスと違ってこれで事足れりとは考えておらず、2つの秩序の区分がつけられるとしても、自生的秩序の中に設計的要素が含まれることには違いがないという意味では、サンドファーの批判が完全に論駁されるわけではないとする立場を取る。そして彼は、後にハイエクが設計主義的合理主義への批判を展開した『法と立法と自由』第3巻(Hayek, 1979)で論じている「立憲政体モデル」は明らかに設計的秩序の一例だと指摘している。

自生的秩序概念の中に設計的要素が含まれるのは矛盾だと捉える点では、コールドウェルはサンドファーに同意している。しかしコールドウェルは、この矛盾を単純に否定して切り捨てるのではなく、矛盾した主張をするに至ったのはそうさせる時代背景があったからだと考えている。端的に言うと、1930年代から40年代にかけては「計画」経済があらゆる社会問題の解決を導くと一般的に信じられており、ハイエクの設計主義批判はこの風潮に対抗するものだった、ということである¹⁴。

そしてこのときハイエクが頼みとしたのが本論文の2で触れた古典的自由主義の理念である。ここで注意すべきなのは、強力に設計主義を批判したとはいうものの、その主張が単なる自由放任主義であるわけでは決してなく、また計画のすべてを否定したわけでもないということである。個々人は多様な目的を追求するために自由に計画することができるのであり、批判されるべきなのは個々人の自由な意志決定を奪う中央集権的な決定システムである。そして、個々人の自由な意志決定が可能となるために必要な制度を整える役割が政府に期待される。コールドウェルはこれを「自由とその経済システム」の中に政府

¹⁴ これは特に Hayek (1944) の全体的な基調として認められるだろう。

を位置付けるハイエクのやり方だと述べている。たしかにハイエクは、市場には供給できないサービスがあり、それらは公的サービスとして政府によって供給されるべきだと考えていた¹⁵。契約の履行に対する保証制度や私有財産保護などに関わる諸制度はこの公的サービスに当たると見てよい。

設計主義的計画の代わりにハイエクが提示したのは、人々の自発的な交換を促進する場としての市場である。個々人が自らの目的を自由に追求することによって、彼らが所有する知識（分散された知識）の有効利用が促進される¹⁶。分散された知識の一括管理を目指す中央集権システムよりも、分散された知識の利用をばらばらな諸個人に任せる市場の方が、はるかに知識の社会的な有効利用が図られるとハイエクは考えている。

コールドウェルによれば、市場システムが有効に機能するには市場以外のさまざまな制度にも市場メカニズムが含まれている必要があることをハイエクは生涯を通じて主張したが、なかでも交換を促進する慣習法と道德体系とがこれらの制度の主要なものだとみなされる。つまり慣習法や道德も人々の自発的交換の過程から生み出されたものだということである。後年のハイエクの主張の中心は「自生的秩序と進化の対概念」へとシフトしたが¹⁷、この頃になると設計主義批判は弱まり、むしろ彼が主張した「自由の条件」が介入主義や「社会正義」の要求などによって弱体化されるのではないかという懸念が強まっていたとコールドウェルは見ている。社会主義諸国の「設計」に対する積極的な

¹⁵ このような指摘は Hayek (1944,1947/1948,1960,1976,1979) など、多くの著作や論文の中で見出される。

¹⁶ 知識の問題をめぐるハイエクの議論については、Hayek (1937) 及び (1945/1948) 参照。

¹⁷ この「対概念」について、ハイエクはそれが 18 世紀イギリスで確立されたものとの見解を示している。Hayek (1979) 及び Hayek (1973/1978) 等を参照。特に後者においてハイエクは、この概念の確立に決定的な役割を果たした人物としてマンデヴィルを挙げている。また、自生的秩序の概念も含めて、ハイエクの思想的なアイデアの原型は、『隷従への道』(Hayek, 1944) にほぼすべて現れているのではないかと思われる。そう考えるなら、ハイエクは後年になって自らの思想的基盤が古典的自由主義にあることを再認識したといえるだろう。

批判ではなく、アメリカの自由主義が国内情勢によって捻じ曲げられてしまうことへの危惧を表明しているというわけである。時代的に見れば、当時のニクソン政権は賃金統制や環境保護政策に積極的であり、また所得政策を求める世論も大きかったと言われる。このような時代状況がハイエクの眼には「自由の条件」の軽視と映っていたのだろう。

ハイエクの主張とその変化に時代が反映されていたと見るのは妥当だと思われる。しかし力点の変化の根拠を社会背景に求めることができるとしても、市場を成り立たせる様々な制度がいかんにして生じたかの説明は、また別の問題である。単純な狩猟・採集生活を行なってきた我々人類の本能や、社会の欠陥を意識的に改良しようとする我々の理性に、市場システムは反しているようにすら見えるにも関わらず、市場が現在のような複雑な姿で存立しているのはなぜなのか。この疑問に対してハイエクは、交換を拡大し、分業と専門化（specialization）を促進し、様々な技術の開発を推進するような制度を選びとった集団が、社会としての成功をおさめた結果である、との解答を示した。これは極言すると、市場を発展させることがたまたま人類の存続と繁栄をもたらしたから市場が存立しているのだ、という説明である。しかし、道徳を含める社会制度の成立をこのように（目的をあらかじめ設定しないという意味で）進化論的に説明すれば、生成した秩序に対する規範的な評価と判断の基礎を失うことになる。「勝ち残ったものが良いものなのだ」ということなら、「勝ち残るかどうかな」という点にしか我々は評価の基準を見出せない。人類は秩序を自生させもしたが、同時に、意識的に設計された秩序をも生み出してきた。「生成し維持された」ということは「勝ち残った」ということである。だとすれば、自生的秩序は正しいが設計的秩序は誤りだと判断することはできないはずである。

この疑問に対してコールドウェルは2つの答え方を示している。1つの答え方は、設計的秩序への批判と倫理的な制度発展の進化論的説明とをレベルの異

なる議論だとする見方による。まず設計的秩序批判に関しては、ハイエクをルール功利主義者とみなし、設計的秩序への批判はその望ましくない側面に向けられたのだと捉える。ルール功利主義ならば集団内の最大多数のメンバーに利益をもたらすようなルールが選ばれるということになり、そのルールは自生したものでも設計されたものでも構わない。そうすると、最大多数の最大利益が実現されなかった場合にのみ、設計的秩序は批判されるということになる¹⁸。この「最大多数の最大利益（最大幸福）」が実現されないという側面が設計的秩序には含まれているので（望ましくない側面）、ハイエクはそれを批判したのだという解釈である。他方、ハイエクが進化論の観点から行なった議論は、倫理的な制度の起源、維持、機能に関する実証的な説明を与えるためだという。設計的秩序に対しては規範的な批判を行なったが、自生的秩序に関する進化論的な説明は、単に事実の説明をしているにすぎないのだ、という捉え方である。このような意味で、2つの議論はそれぞれ規範的／実証的という異なる視点（レベル）からの議論だということになる。そもそもの疑問に戻れば、ハイエクは設計的秩序に対する自生的秩序の優位を、進化論的な立場から示そうとしたのではないという応答の仕方が、この論理から導かれるだろう。

コールドウェルはこの解答に関して、重要な指摘をしている。ルールは確かに選択されるが、選択の対象となるルール自体には意図的に提案される余地がある。ルールが何らかの目的の下に提案されるのだとしたら、そこには設計主義的な要素が含まれる。ハイエクはルールを「目的独立的」なもの（ノモス）と「目的依存的」なもの（テシス）とに区分した。前者は誰の意図にもよらず生成され維持されるが、後者は誰かの意図によって生成される。提案されたル

¹⁸ 秩序の自生にはルールの盲目的な遵守が必要とされるが、その結果個人が苦境を強いられる場合もありうる。それをハイエクは排除しない（できない）。そうだとすれば、これを「ルール遵守による最大多数の最大幸福の実現」と読み替えるのは誤った解釈だとは言えない。この論点に関しては、山中（2007、第2章）参照。

ールとその実践が試験的に行なわれ (tried out), うまくいくものが選択される。もちろんここでのルールは特定の人や集団の利益をもたらすものであってはならず, 強いて言えば「最大多数の最大利益」を目指すものでなければならない。ハイエクが提案した立憲政体モデルはこのようなルールであり, さらにそれはピースミールな社会改良ではなく, 社会全体のあり方を決定するようなルールである点に注意が必要だ, とコールドウェルは述べている。

ももとはピースミールな社会改良として新たなルールが提案されるとしても, それが施行 (または試行) され定着していく実験的な過程を通じて, 社会のあり様もそのルールに影響されて変化していくだろう。しかし, そうであればこそ, そのルールが伝統または慣習として維持されるようになるかどうかは, 社会進化 (文化的進化) の結果として決定されるところでしかありえない。

もう一つの答え方は, ハイエクは規範的な主張を行なっておらず, ひたすら実証主義的な態度に徹しようとしたのだというものである。コールドウェルは, 一般にオーストリアンがウェーバー的な価値自由の態度を示すことから, ハイエクはこの解答の方を好むだろうと述べている。たしかにハイエクは, 社会主義の目標を社会主義の方法すなわち中央集権システムで達成することは不可能だということを方法論上の誤りとして指摘しようとしたのであり, 社会主義の目的(イデオロギー)自体を必ずしも批判のターゲットにしているわけではない¹⁹。

ハイエクは, 現存する社会秩序に対してなんらかの計画を強制しようとすれば, 財産の剥奪や飢餓などの苦境を多くの人々に強いることになるかと述べている²⁰。これを実証主義的な観点からの見解と捉えることも可能であり, 設計主

¹⁹ 例えば Hayek (1944:35(邦訳 38 頁)) 等に, このハイエクの考え方がもっともよく現れている。ハイエクの社会主義批判の狙いは, 計画経済という方法論の難点をつくことであり, 社会主義の目的自体に向けられたものではない。我々のすべてが自由で平和な豊かな社会に生きられるようにとの願いは, 少なくとも発生当初の社会主義と, 現在まで続いてきた自由主義との双方に共通するものである。

²⁰ Hayek (1944:Chap.3) 等。

義（この文脈では集産主義）の方法論上の誤りを指摘するというハイエクの意図を考えれば、むしろ規範的な意味合いは薄いとも受け取られる（手法とその目的実現との間の因果関係について、実証的な説明を与えたにすぎない）。集産主義に関するハイエクの指摘の正しさは、南北朝鮮や、かつての東西ドイツなどの対立のあり様を見れば理解されるだろう、とコールドウェルは述べている。

たしかにハイエクは多くの場合、言説上は実証主義的な態度を示している。しかし同時に彼は「自由」について次のように述べている。

一部の読者は、私が個人的自由の価値を議論の余地のない倫理的前提とせず、その価値を説明する際、これを支持する議論を一つの便宜的なものとしてしまうこともあるのでは、という印象を抱いて戸惑うかもしれない。それはおそらく誤解である。しかし、これまで我々の道徳的前提を共有していない人びとを説得しようとするなら、それらを単純に仮定してしまっただけとはいけないということは真実である。我々は自由が単にある特定の価値であるばかりではなく、大部分の道徳的価値の源泉であり、条件であることを明らかにしなければならない。自由社会が個人に与えるものは、彼のみが自由であった場合に彼がなしうるものよりもはるかに大きい。それゆえ、我々が自由の価値を十分に評価するためには、自由の社会が、不自由のいきわたっている社会と比べて、全体としていかに異なるのかを知らなければならない。(Hayek, 1960:6(邦訳第 I 巻 14 頁)；下線引用者)

自由が自らの「道徳的前提」であり「大部分の道徳的価値の源泉」であるということは、自由そのものの価値が認められていることを示すように見える。そうだとすればハイエクの価値前提は「自由」である。これは実証主義的態度

ではなく、規範的立場の表明である。自由に基本的価値を認めるという倫理的立場に立って自由の侵害を批判するならば、この場合の批判はもちろん規範的な批判となる。と同時に、そのような道徳的前提を今までもってこなかった人々がいるならば、彼らに対して自由の価値を説くためには、個人の自由を侵害する倫理的態度がどのような点で望ましからざるものなのかを示さなければならぬ。

社会主義は方法論上の失敗に陥るとするハイエクの議論は、社会主義イデオロギーあるいは社会主義が掲げる目標自体への批判ではないとしても、その背後には古典的自由主義のイデオロギーが強固に存在しているという点で、単に実証的な議論なのではなく、倫理的・規範的な議論であり、かつ価値前提の表明でもあるだろう。

おそらくコールドウェル自身もこのことは十分承知のはずである。そうでなければ上述の 2 つの解答のうち、最初の解答を示す必要はないはずである。ハイエクの示した「立憲政体モデル」が設計主義的であると認めつつ、それを自生的秩序形成のプロセスの中で整合的に捉えようとしているのは、コールドウェルがハイエクの言う「自由の価値」に共感しているからではないだろうか。個人の自由な行為から秩序が自生し、それを改良し進化させるのもまた個々人の自由な行為とその相互作用である、という考えを支持しないのであれば、秩序の自生プロセスにも矛盾があるので設計主義の規範的批判は困難だと認め、秩序の自生現象を実証的見地から説明するのがハイエクの主眼であるとだけ述べればよい。

サンドファーの批判に対してコールドウェルが示した応答をまとめておこう。まず自生的秩序と設計的秩序の原理的区分に関しては、コールドウェルとハスナスの見解は大筋では同じであると見てよい。社会秩序全体のあり様をいかなる方向へと導くのか、その決定が一人の人間（または一つの機関）に委ねられるかどうかということに境界線を引くならば、この 2 つの秩序は明確に区

分される。決定原理において両者は異なる。たしかにこのような区分のしかたはハイエクの設計主義批判の中に見出される。

だが、設計主義に対するハイエクの規範的批判が有効かどうかに関しては、コールドウェルとハスナスの見解は異なる。ハスナスが 2 つの秩序の原理的な区分が可能なら一方を支持する立場から他方を規範的に（価値判断の立場から）批判することが可能だというドライな見方を示したのに対して、コールドウェルはハイエクの設計主義批判の理由を時代背景に求めている。さらに彼は、古典的自由主義を積極的に支持して強力な自由社会擁護論を展開した前期から、集団淘汰論に象徴される「自生的進化と秩序の対概念」へと主張の基軸を変更したと見られる後期にかけて、ハイエクの自生的秩序論に揺らぎが生じたと考えている²¹。

コールドウェルはその揺らぎの原因をハイエクの議論手法に見出そうとしている。必ずしも明示的に述べてられているわけではないが、前期までの議論が規範論的手法（「～べきだ」という主張を積極的に行なう）に傾斜する印象を与えるのに対して、後期の議論では記述的手法（「～である」という事実報告的主張を主眼とする）をもって議論を展開した、コールドウェルのハイエク解釈をそのように読むことができるだろう²²。

²¹ ハイエクの思想を時期的に明確に区分できるかどうかは議論されるべき課題だが、ここでのコールドウェルの見解に従う限り、一応 1960 年代頃までを前期と考えることにする。著作で見れば『自由の条件』（1960 年出版）の前後までが前期、『法と立法と自由』の第 1 巻（1973 年出版）以降が後期ということになる。後者の第 3 巻における文化的進化の議論では、コールドウェルや後に見るヴァンバークが指摘しているとおり、前期の「秩序の自生」に集中した論調から「自生的秩序と進化の対概念」における進化とりわけ集団淘汰の概念に訴える論調への転換が見られないわけではない。だが「自生的秩序と進化の対概念」は前期の著作の中にすでに現れており、時期を隔てて根本的な主張の転換があったわけではないと私は考える。

²² 規範分析という実証主義（科学）的態度は可能だが、社会規範のあり方について実質的な議論を展開しようとすれば、規範倫理学に見られるように、多かれ少なかれ、論者は自らの責任において、尊重されるべき価値についての主張をしなければならなくなると考えられる。

ところでハイエク自身は、前期を代表すると思われる『自由の条件』（1960年出版）と、後期を代表すると思われる『法と立法と自由』（1973～79年の間に3巻に分けて出版）との関係について、次のように述べている。

前の著作『自由の条件』では、現存タイプの政府が自由を存続しようと望むならば従わなければならないであろう諸原理の叙述にとどめた。現行制度がそれを不可能にしているということが段々と分かるにつれて、最初は魅力的なだけで実行不可能な観念であると思われたものへの傾倒がますます進み、ついにはそのユートピアから奇妙さが消え、それこそが自由主義的立憲主義の創始者たちがなしえなかった問題の唯一の解決に見えてきた。(Hayek, 1973:10(邦訳 3-4頁))

ハイエクは1960年代という時代に危機的な空気を読み取っていたようである。自由企業に対する社会的制御の必要性が声高に唱えられるようになったのもこの時期である。設計主義的勢力の強まりに対して、それが社会をあらぬ方向へと導いていくことを人々に説得するために、ハイエクがさらなる論陣を張ろうとした（『法と立法と自由』）のは自然なことである。彼は個人の自由の価値を護ろうとした。ただし、それを護ること自体が彼の最大の目的だったのか（個人の自由＝目的）、時代の危機的状況を回避することを最大の目的として、その目的のために個人的自由の尊重という主張が必要になると考えていたのか（個人の自由＝手段）、それはどちらともいいがたい。ただし、『法と立法と自由』のプロジェクトに関するハイエクの次の記述には注意が必要だろう。現行（当時）の政治機構が「変化する社会における既存の生活水準の引き上げはいうまでもなくその維持にも必要とされる適応を社会に許さない」ことを行き詰まりと捉え、彼は次のように述べている。

人々によってつくり出された制度によってこのような手詰まりへと導かれてきたことが認められるには多少時間がかかるであろう
 (・・・) 私は、そのためには現在広く受容されている信念を根本的に改めることが必要であると確信しているから、あえて本書で、ある制度的発明 (some institutional invention) を提唱するのである。
 (ibid.:10(邦訳3頁)；下線引用者)

「制度的発明を提唱する」という表現に、我々はある種の設計主義臭さを感じはしまいか。ハイエクは「発見 (discovery)」とせず「発明」としている。ここでいう「制度的発明」とは、上でも触れた立憲主義的な政体モデルを指している。「自生と設計」の対比のアナロジーで語るなら、「発見」に対置されるのは「発明」だろう。ハイエクは「人による支配」はレントシーキングの連鎖を生み出し、個人の多様な目的追求の機会を奪うことになるゆえ、権力者の手をも縛る「法による支配」が重要だと説いたが、設計主義勢力の増長を退治できるのは自生の原理ではなく、設計主義そのものに頼るほかないと考えたのだろうか。いずれにせよ、これはハイエクが自生と設計という2つのはたらきとの関係をいかなるものと捉えていたのかに関係する。

コールドウェルの議論からやや逸れてしまったが、彼が指摘するように、自生的秩序をめぐるハイエクの議論がある種の転換を示していると見ることは可能だろう。この転換をハイエクの変節だとは捉えないとしたら、ハイエクの議論の曖昧さがこの転換に現れているという見方ができる。人間の社会として適切な社会が進化を生き残ってきたという集団淘汰論は、それがいかに設計主義批判と結び付けられようとも、たしかに記述的色彩の強い説明である。ハイエクは、自らの価値前提としての「自由の価値」を根本から擁護したいのか、それとも、納得のいく説明が与えられれば「強制からの自由」という価値論的主張が集団淘汰論から導き出されると言いたいのか。ハイエクの議論には曖昧さ

がある、たしかにこの点は否めない。

6 応答（3）—ダニエル・B・クライン—

最後にダニエル・B・クラインの応答を取り上げよう（Klein, 2009）。コールドウェルが、ハイエクの論調に見られる揺らぎに対して、その曖昧さがハイエクの弱点にもなりうると見る傾向を示すのに対して（そう見るからこそ時代背景を持ち出してハイエクを擁護しようとしている）、クラインはその曖昧さこそがハイエクの強みなのだと考えている。その曖昧さがハイエクの議論を豊かにし、汲めども尽きぬ論点の豊富さの源となっている。クラインは我々がハイエクから多くを学ぶ可能性を主張したいようである。

クラインは「計画者には何も計画できず、しかし同時に何でも計画できる、ということが、ハイエクの規範論的主張（precepts）を壊すだろう」²³ というサンドファーの文章を取り上げ、これに対して「自分ならこの『規範的主張』という語を『言明（statements）』に変えるだろう」と述べている。これはどちらかといえばハイエクの議論の基調を記述的なものと見る方向性を示しているが、だからといってハイエクが必ずしも規範的主張を避けようとしたというのではなく、むしろ古典的自由主義のシンプル（に見えるよう）な主張をハイエクが真っ向から受け止め、そこに見出される問題と彼が格闘しようとしているのだ、とクラインは解釈している。だからこそ我々は、ハイエクの議論から多くの論点を引き出せるのだろう。

²³ これは Sandfur (2009) の末尾の文章。サンドファーの批判の復習になるが、この文章は次のようなことを意味している。社会を観察する人がレンズの倍率を上げて組織の一つを観察すると、そこには独裁者の計画者が立案した計画に従って人々が動いている様子が見える。ところがレンズの倍率を下げて社会全体を眺めると、自生的秩序の進化過程で生成・消滅を繰り返す組織を観察することができ、設計主義的計画者がいくらがんばって計画しようとしても、秩序はおろか組織さえも、自分の意志で完全に計画することなど永遠に不可能だと思える。ならばそれをことさら自生に反する計画だとして批判することに意味があるのか。サンドファーはこの一文で、以上のようなことを表現している。

クラインによれば、ハイエクの議論には暗号 (code) めいたものがあり、用いられている語には表面的な意味に留まらない含みがあるという。本能と理性との間に位置づけられる「慣習」という語には「自由の原理」が含意され、「発見的手続きとしての競争」ならば「発見の手続きとしての自由」、「市場」に対しては「自由」、「非中央集権的 (non-central) 意志決定 vs. 中央集権的意志決定」という対比においては「より多くの自由 vs. より少ない自由」という対比がその真意であるというように、クラインは用語とその含意との対応を考えている。クラインの見解に従えば、ハイエクは自らの規範的主張、端的に言えばそれは個人の行動の自由を最大に尊重すべきだというものだが、このような主張を、人間と社会の進化、あるいは市場機構や社会体制などの有効性の議論に変形させながら絶えず繰り返していると理解することができる。たしかに、社会主義は方法的に失敗するとして自らの議論の記述的 (実証的) 性質を強調するような言い方をしておきながら、結局は社会主義を含む設計主義的合理主義は個人の自由を奪うものだという規範論的批判を力説するのは、どこか矛盾した議論のようにも思える。

個人を自由に行動させた方が社会全体はうまく運営される (目的論的説明) というのではなく、個人の自由は絶対不可侵の領域であり、それを尊重してきた (義務論的説明) からこそ人間の社会もここまで成長・発展できたのだと説明すること (自由の規範性の最重要視) が、ハイエクの真意なのだとクラインは読んでるように思われる。しかし彼はそれを決して明言せず、むしろ反対に、ハイエクの議論の記述的性質に焦点を合わせるような論じ方をしている。彼は「非中央集権的 (自生的) vs. 中央集権的 (設計的)」というハイエクの二分法的対立の構図を曖昧だとしたサンドファーは正しいとしているが、しかしその二分法的対立の背後には「より多くの自由 vs. より少ない自由」という構図があると捉えている。規範的主張を記述的説明で包もうとするので曖昧さが浮き出ることになる。だがこのような擁護のしかたは、ハイエクの議論に

積極的な規範的主張が込められていると見なければ出てこないはずである。

クラインは「自生的 (spontaneous)」という語は「自由な (free)」を意味するものと理解している。したがって「自生的秩序」は「自由な秩序」である。これは正当な理解だろう。自生の原理たるノモス (自由の法) は、人々の自発的な交換活動の結果として生じてきた。そのノモスに従う人々の行動から成長した秩序が自生的秩序であり、この秩序は市場に象徴されるとおり、人々の自発的な交換活動を促進する場である²⁴。

次にクラインは「秩序 (order)」という語を取り上げ、この語に関してはサンドファーの批判は重要な問題を提起してはいるものの、しかしその批判には行き過ぎがあると述べている。見方によって秩序は自生的にも設計的にもなるというのがサンドファーの批判だが、これは自生の過程で設計的秩序が生じるという点を指摘するものであり、クラインはこれを重要な問題の提起と見ているようである。だが他方、自生と設計という相反的性質の秩序について前者が後者を含むというのは矛盾だとする点は、クラインによれば行き過ぎである。ここで彼はカードの例を挙げている。「繰り返しシャッフルされたカードにも一つの秩序があるはずだ」。固定された4種各13枚計52枚のカードの順列ではあるとしても、それが秩序だというのはどう見てもこじつけだが、クラインが言いたいのはむしろ、生成された秩序がいかなるものであるかよりも、それが絶えず生成過程に含まれる (シャッフルされ続ける) という点の重要性にある。サンドファーは生成された秩序の間に見られる矛盾を重視しているが、これがクラインから見れば過度な批判だということになる。

²⁴ クラインは、ハイエクが自由原理の設計主義的發展 (制度設計などを指すと思われる) を過度に拒絶したとするサンドファーの批判にも賛成すると述べている。なぜなら設計主義の存在が自由原理の發展の支え (fulcrum; 梃子の支点) にもなるからである。サンドファーがハイエクに対する積極的な (外在的な) 批判を展開するのに対して、クラインがハイエクを内在的に批判する立場からその利点を見出そうとしていることが、このような応答に現れていると思われる。

彼はカードの例を引き継ぐようにして「自生的秩序論は連鎖 (concatenation) を表現しており、設計的秩序との比較において、自生的秩序における意志決定は非中央集権的であると述べているにすぎない」と指摘している。自生的秩序の方が設計的秩序よりも優れているという見方に固執するのではなく、自生とはこういうものだとの記述的説明を与えようとしたのだとクラインは見ている。それゆえ、この連鎖の過程から有益な結果がもたらされれば、自生的秩序の優れた性質が輝くということになる。自生的秩序それ自体は魅力的な連鎖的調整 (concatenate coordination) を含意しているわけではなく、場合に依拠してそうなる（設計ではなく行為の結果としてたまたま魅力的な状況が生じた）。ハイエクはそう指摘しているだけなのに、サンドファーはそこを読み違え「設計を含む自生」は、後者が前者を規範的に批判する以上、矛盾した主張であるとのハイエク批判を提示することになってしまった。クラインはこのように、サンドファーの批判はハイエクを誤解したものだとの評価を下している。

しかし、クライン自身もハイエクを支持したいがために、やや曖昧な論じ方をしているような印象を受ける。彼は「連鎖的調整は価値判断の問題 (evaluative affair) だ」と述べている。例えば企業家が株主の意向に反応して行動する場合があるのは、それが企業家自身の利益を増すならば当然である。そこで倫理的には「公正な利益」などといった価値基準を設けて行動の調整を行おうと試みられる場合がある（企業倫理を問題とする場合など）。たしかにこれは明確なルールではあろう。しかしハイエク（クラインはロナルド・コース等も挙げているが）は調整の範囲を拡張したために、基準もルールもいきおい曖昧になってしまった。「公正さ」を具体的に定義するには、それが問われる文脈に依存せざるをえず、それゆえ意味内容がある程度は流動的になるのを避けられない。

クラインによれば、人々の行動の（倫理的な）基準となりうるのは秩序を視

察する人の識別能力（sensibilities）であり、クラインはこれをスミスに負っている。ここで含意されているのはもちろん「公平な観察者」である。クラインはスミスを引用しているが、彼の引用箇所の前後を含めてスミスの記述を示そう。

正義の諸原則が厳密に規定されていてしかも正確な唯一の道德上の原則である（・・・）あらゆる他の美德の原則は漠然としていて曖昧で不正確である（・・・）前者はこれを文法上の諸原則に比較することができるかもしれないが、後者はこれを評論家が創作における崇高なものないしは優美なものを達成するために制定する諸原則、したがってそれは我々に対して、我々が目指さなければならない完全性を獲得する上における何らかの確実な、間違いのない指令を与えるというよりは、むしろそのような完全性に関する一般的な観念を与えるところの諸原則に匹敵する（Smith,1981/1759:327(邦訳 683頁)；下線引用者）

どのような連鎖的調整が正しいのかは、明確な基準をもって判断されるわけではない。ハイエクの考える正義観念が具体的には「～してはいけない」という否定形でしか表現されないように、自生的秩序における調整の基準も、その具体的な内容が「～すべきである」という積極的な表現で与えられるものではない。実際には我々の相互的な行動の過程を通じて、試行錯誤されつつ徐々に調整が進んでいく。ハイエクは私有財産制と契約の履行の保障とが市場に必要な条件だとしたが、同時に市場経済が含みうる問題はこれらの条件がルールとして守られた後に生じると述べている。それはクラインが指摘するような連鎖的調整の過程を指しているのだと思われる。

人々の間で徐々に「公平な観察者」が形成され、曖昧なルールとして機能す

る道徳感情が醸成されてきた。それは曖昧であるがゆえに可変的であり、また発展的でもある。我々は完全性を目指すべきではあろうが、今そこには存在しない（知り得ない）完全性をあたかもあるかのごとく想定して、そこからルールを引き出そうとするのは、人々にある種の「正しさ」を強制する設計主義的合理主義への転落を意味する。

クラインは「調整を論じる際には我々は、その基礎となるメカニズムと、我々が支持すべき識別能力〔道徳感情〕との双方について学ぶのである。この豊かな（large）識別能力において、我々は自由の信念（presumption）に対する正当な根拠を見出すことだろう」と述べている。連鎖的調整を持ちだした後の議論は、クライン自身の連鎖的調整論を述べるかたちになっていて、サンドファーに対する応答の様相が薄らいでいる。本題（！）に話を戻せば、サンドファーのハイエク批判は、サンドファー自身が曖昧さを認めないことによって、つまり完全性を明確には示しえないハイエクの議論のスキーム的性質を攻撃することによって、ハイエクが批判した設計主義の問題点をそのまま醸し出すことになっている。クラインの応答をこのように解釈することができるだろう²⁵。

7 結論

サンドファーのハイエク批判は、端的に言えば、ハイエクが自生的秩序の中に設計的秩序が含まれるとする点に中心を置いている。しかしこの点を批判することは、設計主義的合理主義の立場を示しているように思われる。2種類の秩序を対立的なものとしてしか捉えなければ、なるほどサンドファーが批判するとおりハイエクの議論は矛盾したものに見える。だが、ハイエクが2つの

²⁵ クラインはハイエクの議論が近代的文脈（a modernist age）にはなじみにくいという見解を示している。これはハイエクの科学主義批判に通じる。クラインは、近代的文脈における社会学者は、我々の倫理的な認識能力（our ethical sensibilities）を探索し育てることは有用でないと述べている。クラインの「ハイエキアン宣言」とでもいえるような主張である。

秩序を対立すると同時に補完的でもあるものとみなしていたとすれば、自生的に成長する秩序の中に、まさにその成長の過程で、設計された秩序（組織）が含まれていたとしても、矛盾があるとは言えまい。これを矛盾とみなすのなら、自生か設計かのどちらか一方のみを支持することを迫ることになる。たしかにどちらか一方のみを支持するのなら、他方に対して規範的な批判を加えることもできる。だがそれは同時に、批判される方の秩序の出現を防ぐような、制度上の意図的設計を必要とすることになるだろう。あたかも体制批判を禁じる独裁政権のように、である。ハイエクはこのような態度をこそ設計主義的合理主義が含みもつ危険性と捉えていたのではなかったか。もしも自生した秩序にしか社会的な正当性が認められないとすれば、設計的秩序を回避するという目的を人々に強制するという意味で、そのような態度もまた設計主義に属する。サンドファーが設計主義者であるならハイエクの議論の無効性を訴えるのは自然だともいえる。

ハスナスが示した応答は明快ではあるが、秩序を評価する規範的（倫理的）基準を秩序の自生的成長過程の外部に置こうとする点では、実はハイエクに対する批判的見解を含むものとなっている。ハスナスの議論には曖昧さがない。その曖昧さのなさこそが、サンドファーと同様の設計主義的思考に陥ってしまうような危うさを感じさせもする。逆に、ハイエクの曖昧さを肯定的に捉える解釈を示しているのがコールドウェルとクラインである。ハスナスのいうように自生的秩序と設計的秩序との原理的区分がつけられるならば、一方から他方を規範的に批判することは可能である。だが、設計的秩序を批判したからとて、設計的秩序の存在を全否定することにはならない。設計的秩序に対する批判は、同時に自生的秩序に対する批判をも含むはずである。それはコールドウェルのいうような、自生的秩序に関するハイエクの論調の性質的な転換というかたちで現れてもいるだろう。またクラインがいうように、規範（価値基準または倫理的な行為基準）が人々の間の相互作用の結果として生成し変化し続けるもの

であれば、他者に対する批判は自己に対する批判を含むものともいえるだろう。

ハイエクは自生的秩序のみが秩序の「正しい」あり方だと考えているわけではない。時に応じて設計を必要とすることもあり、現に我々は政府という設計的秩序の典型例を必要としてきたし、政府の必要性はハイエクの認めるところでもある。また市場の成長にとって企業という組織は必要不可欠の役割を担っているが、ハイエクはこれを設計された秩序の一例と位置付けた。しかし企業を危険な存在として退けているわけではない。「正しさ」または「正義」とは、その中身が曖昧かつ流動的なものである。時代により、文化により、条件により、その中身は多様さを示すだろう。

設計主義的合理主義という思考形態を批判し、それが生み出した不幸な例として社会主義を含む全体主義に徹底的な批判を加えることは、ハイエクのライフワークのひとつであったが、それは設計的秩序に対する全否定を意図したものではなかった。これを曖昧な態度とするならば、ハイエクのいう秩序の自生的な成長（進化）そのものを否定することになる。この進化過程における人間の試行錯誤の結果として設計的秩序も出現してきたのであり、絶えず自生のダイナミズムに取り込まれることによって（クラインのいうように、シャッフルされ続けることによって）批判され、また変化していく。「秩序」全体（自生的秩序）のあり様を意図的に決定するような権力装置として「組織」（設計的秩序）が固定化することは自生のダイナミズムによって回避される。言い方を換えれば、「組織」が「秩序」の自生作用を妨げるような性質を備えているからこそ、秩序の自生というダイナミズムがはたらき続けるともいえる。

2種の秩序間のこのような相互作用の重要性を主張することには、両者が対立的な性質をもつものであればあるほど、たしかに曖昧であるとの印象を免れないかもしれない。それゆえサンドファーはこの曖昧さがハイエク自身のウィークポイントだとしているが、しかしハイエクの議論の強力な点はこの曖昧さにこそあると思われる。

引用文献

- Caldwell, B., 2009, “Making Sense of Hayek on Spontaneous Order”, at <http://www.cato-unbound.org/2009/12/14/bruce-caldwell/making-sense-of-hayek-on-spontaneous-order/>
- Hasnas, J., 2009, “Four Solutions to Sandfur’s Problems”, at <http://cato-unbound.org/2009/12/09/john-hasnas/four-solutions-to-sandefurs-problems/>
- Hayek, F. A.,
 1937/1948, Economics and Knowledge, in Individualism
 1939, Freedom and The Economic System, The University of Chicago Press
 (以下, UCP と略記)
 1944, The Road to Serfdom, UCP (西山千明訳『隷従への道』1992, 春秋社)
 1945/1948, The Use of Knowledge in Society, in Individualism
 1946/1948, The Meaning of Competition, in Individualism
 1947/1948, “Free” Enterprise and Competitive Order in Individualism
 1960, The Constitution of Liberty, UCP (気賀・古賀共訳『自由の条件Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1986～87, 春秋社)
 1962/1967, Moral Elements in Free Enterprise, in Studies
 1967, The Results of Human Action but not of Human Design in Studies
 1973, Law, Legislation and Liberty vol.1 Rules and Orders, Routledge (矢島・水吉共訳『法と立法と自由Ⅰ ルールと秩序』1987, 春秋社)
 1973/1978, Liberalism, in New Studies
 1976, Law, Legislation and Liberty vol.2 The Mirage of Social Justice, Routledge
 (篠塚慎吾訳『法と立法と自由Ⅱ 社会正義の幻想, 』1987, 春秋社)
 1979, Law, Legislation and Liberty vol.3 The Political Order of Free People, Routledge (渡部茂訳『法と立法と自由Ⅲ 自由人の政治的秩序』1988,

春秋社)

※Studies は, Hayek, F. A., 1960, Studies in Philosophy, Politics and Economics, UCP。

※New Studies は, Hayek, F. A., 1978, New Studies in Philosophy, Politics and Economics, UCP。

※Individualism は, Hayek, F. A., 1948, Individualism and Economic Order, UCP (嘉治元郎・佐代共訳『個人主義と経済秩序』1990, 春秋社)。

Klein, D. B., 2009, "Liberty between the Lines in a Modernist Age", at <http://www.cato-unbound.org/2009/12/11/Daniel-klein/liberty-between-the-lines-in-a-modernist-age/>

Sandfur, Timothy, 2009, "Four Problems with Spontaneous Order", at <http://www.cato-unbound.org/2009/12/07/timothy-sandefur/four-problems-with-spontaneous-order/>

Smith, Adam, 1759/1981, The Theory of Moral Sentiments, Liberty Fund (米林富男訳『道徳情操論』1969, 未来社)

佐東大作, 2011, 「ハイエクの自生的秩序論－自生と設計の相補性－」『筑波大学経済学論集』, 63 : 1-51

山中優, 2007, 『ハイエクの政治思想－市場秩序にひそむ人間の苦境－』勁草書房